

下田市景観計画を見つめ直す

下田市景観計画を見つめ直すー下田市景観まちづくり審議会作業部会の設置ー

平成 16 年（2004）に景観法が施行され、下田市は平成 19 年（2007）に景観行政団体となりました。その後、平成 21 年（2009）に下田市景観まちづくり条例の制定、同年下田市景観計画（以下、「計画」）を策定し、これまで景観まちづくり施策を推進してきました。

景観施策の方針を示す計画は、策定から 10 年以上経過しました。その間に、景観まちづくりの全国的な傾向や考え方は変化してきました。例えば、新築の住宅事情や空家対策、人口減少・過疎地域における事業開発、新型コロナウイルス感染拡大に伴うリモートワーク仕事と休暇の両立を目的としたワーケーション、再生可能エネルギーの推進に伴う大型施設の設置など、計画策定時に比べ景観に影響を与える社会的な情勢は大きく変化しています。

こうした中、現行の計画内容では、適切な景観誘導・形成に向けた取組みを推進していくことが難しくなっています。また、前述した社会情勢の変化により、これまで“当たり前”と思っていた風景が変化しており、伝統や文化の継承問題などは引き続き課題となっています。そうした下田の“景観”を「未来ある子ども達へ伝える」施策にも取組む必要があり、こうした観点を踏まえ計画の見直しに着手することとしました。

令和 4 年 5 月 25 日 下田市景観まちづくり審議会作業部会が発足しました！

令和 4 年 5 月 25 日、下田市景観計画（以下、「計画」）の見直しを目的として、下田市景観まちづくり審議会作業部会（以下、「作業部会」）を設置しました。作業部会委員の任期は 2 年で、その間に計画の抜本的な見直しを行う予定です。

見直しを行う中で、下田市内各所の景観特性を改めて確認するための現地調査を実施するほか、計画本文中に記載する景観特性をどのように表現するか。また、そうした特性を保全し、活用していく開発・事業に繋げていくための、景観形成基準をいかに記載するのか。取り組むべき課題は、多く多岐にわたる予定です。

景観特性を把握するため作業部会で現地調査を実施 令和 4 年 6 月 16 日 浜崎地域 令和 4 年 6 月 20 日 朝日地域（大賀茂地区）

作業部会の発足後、市内各所の景観特性を把握する現地調査に取組み始めました。初回は浜崎地域を調査対象とし、柿崎地区や須崎地区、外浦地区を回りました。また、2 回目は朝日地域の中で、大賀茂地区を調査対象としました。

初回の浜崎地域では、漁村集落と海と山の自然景観とのバランスに景観特性を見出し、これらを保全・活用し、より良い景観形成へと繋げていくためにどのような施策に取組めるのか、今後議論を進めます。また、大賀茂地区では田園風景が特徴的で、その背景（借景）となる集落や建造物・工作物の在り方について現地において議論となり、今後さらに話し合いをもってまとめていく予定です。



現地調査の様子（朝日地域・大賀茂地区）



現地調査の様子（朝日地域・大賀茂地区）



作業部会委員への委嘱状交付



現地調査の様子（浜崎地域・須崎地区）



現地調査の様子（浜崎地域・須崎地区）

下田市景観まちづくり審議会作業部会 安藤部会長インタビュー

◆なぜ現行の下田市景観計画を見直そうと考えたのでしょうか？

その前に、、、皆さんが「景観が良い」、「景観を損ねる」という時の「景観」とは、一体何を指しているのでしょうか。一般的には「景色が良い」、「格好が良い」という意味や、「美しい景観」、「醜い景観」といった使い方ではないでしょうか。

「景観」という言葉が誕生したのは明治時代半ば以降で、英語のランドスケープの翻訳語として作られたと言われます。主に地理学や植物生態学において使われたようですが、現在のように「眺め」や「姿形」として使われ出したのは、戦後のことです。それまでは、「美観」や「風致」という言葉が使われていました。景観研究の草分けである中村良夫氏は、「景観とは人を取り巻く環境の眺めである」※1 と定義しています。つまり、モノ（＝実態・静的）やコト（＝事象・動的）を含め、自分の周りにあるそうしたものが「景観」であると定義しました。実にその通りと思うのですが、これではちょっとわかりにくいですね。

「人を取り巻く環境」には、「景観」がモノだけではなく、コトも含んでいるということを示していますが、私はむしろ、コトに重きがあると考えています。例えば、綺麗な公園ができたといいます。しかし、その公園を利用する人が全く見えなければ、それは良い景観でしょうか？電柱や看板もなく、SF 映画に出てくる未来都市のような整然とした町並みは、果たして良い景観なのでしょうか。

◆では、その目指す景観とは？またそれを実現していく為にはどうすれば良いのでしょうか？

対象（モノ）の色彩や形態について考えることが「景観」で、それを整えることが「景観整備」であるという間違った考えや誤解があると思います。景観は好みの問題だとか、趣味嗜好、更には教養や知識の問題であるという誤解です。それを解く為にはまず、自分自身の目に入るものや聞こえてくるもの、匂いや肌で感じるものに対して、改めて意識することが重要です。そして、その結果を皆さんと共有する為にも、お互いの考えを話し合い理解し合う、その風景こそが「景観」だと思います。そういう場（プラットホーム）を常に設けていきたいと考えています。

もちろん、その為には基盤となる最低限の知識の学習が必要かもしれません。しかし、一番必要なのは、それについて考え、感じ取ろうとする主体的な意識だと思います。なぜなら、一般的に「景観」を意識せずとも、日々の生活や人生に全く関係ないと考えられているからです。いや、それすらも意識されていないでしょう。ですが、「景観」がモノではなく、住む所の環境やそこに住む人間同士の付き合いであり、日々の暮らしのコトだとしたらどうでしょう。「筭の先一つ分の慮り」という言葉があります。筭の先一つ分、余分にお隣さんの敷地や家の前を掃く。つまり、30センチほどのささやかな心配りのことです。これは道徳心というより、周囲の人たちとうまく付き合っていく処世術のようなものですが、たかだか筭の先の、ほんの些細な思いやりですが、それにより、お隣さんとの敷地の境や表の道が綺麗に維持され、改まってお互い何か

安藤泰（あんどうやすし） 経歴
1955年下田生まれ 下田北高～東京理科大学工学部建築学科卒
都内の建築設計事務所勤務を経て 1985年安藤泰建築事務所設立 一級建築士
臨済宗 建長寺派 長松山 泰平寺 22世住職

逆に、買い物客で溢れ店主と客の会話が楽しく飛び交う今にもフーテンの寅さんが出てきそうなイキイキとした暮らしが見える街がある。しかしそこが、電線が縦横に張り巡らされた沢山の電柱や、軒も揃わない看板建築で雑然とした通りだとしたら、それは悪い景観でしょうか。ここでいう景観の良し悪しの判断は、あくまでもモノに対してであり、それを単純に良し悪しで判断して良いものかどうか。モノがいかに素晴らしいでも、人によっては「寂しい」と感じたり、あるいは「人間らしくない…機械的で冷たい」と感じるかもしれません。

では、コトで見たならどうでしょうか。そこに人がいて、それを見る人がいる。つまり、主体と客体があり、人と人との関わりや住む人の日々の営みがある。声が聞こえたり、生活の匂いがしたりする。煩かったり汚かったり、でも楽しかったり嬉しかったりする、、、これら「モノ」と「コト」を総合的に判断し、その結果が誰にでも理解でき、かつ納得できるようにする必要があると思います。その為には何が必要か、もう一度原点に立ち戻って考えたいという思いから、この作業部会を立ち上げました。下田市や隣接する他町を含め、我々が暮らすこの地域を五感で感じながら、私たちの「景観」について考えていこうと思っています。

言わなくても、隣人同士の感謝や良好な関係が生まれてくるというお話です。それが近頃では、社会情勢の変化もあり、ご近所付き合いも無く、隣との境まで掃除すればまだ良い方で、自分の前の道は誰か（行政やボランティア）がやってくれるのが当たり前とばかりに、自分のゴミや落ち葉を敷地の外に掃き出すという、そういった世の中との関わり方が蔓延化してきている印象があります。自分さえ良ければ、他人はどうでも良いという感覚です。

先ほどの筭の話に置き換えれば、隣同士が自分のゴミを掃き出し合った結果、どうなるかは想像できますよね。それがその 2 軒だけでなくその通り全体で行われたら...その通り一本だけでなく見境無く地域全体に広がっていったら...。こうした悪循環に陥らない為にも、また、自分や自分の周りにいる人たちが日常的に気持ちよく暮らしていけるよう、少しでも「社会に対しての思いやり」をすることができれば、それがたとえ小さなコトであっても、少しずつ良い方向へ進むきっかけとなり、結果として大きな成果が生まれてくると思います。

モノ・コト両面において、些細なことからでも自分達の取り組める範囲で取り組み、それを継続する。そうやって、私達自身が誇れる「景観」を目指し、ここで暮らす市民やこの下田を愛する人、みんなで考えていく...そんな仕組みや場を創っていきたい。そのきっかけとして、景観計画の見直しができるかと密かに思っています。

※1 出典：『風景学入門』中央公論社1982

